日本語と中国語における「娘」考

An Investigation of the Same Character “niáng” between Japanese and Chinese

張　培　華
ZHANG Peihua

【要旨】日本語と中国語の語彙について論考はさまざまな角度から研究されてきた。例えば、同形語の解釈の辞書や事典は少なくない。本稿は、同じ漢字である「娘」を取り上げ、単に日本語と中国語の意味の違いを指摘するだけではなく、甲骨文である象形文字の「娘」の構造から分析し、古代から現代まで日本語と中国語における「娘」に関わる表現の微妙なニュアンスを比較して考察する。そもそも同じ漢字である「娘」は、二つの正反対の意味を持っている。一つは「娘」であり、もう一つは「母」である。英語で言うと「daughter」と「mother」である。興味深いことは、日本語では「daughter」の意味として使い、中国語では「mother」の意味として使っている。まさに日本と中国の文化は違うと言えるだろう。しかし、なぜ同じ漢字である「娘」は、日本語と中国語で異なる意味を使っているのか。両国の「娘」に関する史的な表現を考察したい。また注目したいことは、「娘」と「孃」に繋がるということである。この二つの漢字の間に何かの関係があるのではないだろうか。その関係を究明してみたい。これらの一連の「娘」に関わる表現についての疑問を解くことが、本稿の狙い所である。中国伝統の漢字の六書や西洋の語用論などの観点から、日本語と中国語における同形語の「娘」に関する表現の変遷については、具体的な用例を取り上げて、文字から反映した日本文化と中国文化の性格を考察してみたい。

一　はじめに

周知のごとく、日本の漢字は中国から転入されたものである。「娘」も中国からきたことは例外ではない。そもそも、中国の古い甲骨文字の「娘」はどのような姿なのか、なぜ「母」の意味も含まれたのか。日本で平仮名と片仮名が発明されていない時代に「娘」は、どのような意味として使われていたのか。すなわち『古事記』や『日本書紀』では、「娘」は「むすめ」の意味なのか、それとも「はは」の意味なのか。また「娘」の漢字の母国である古代中国では、「むすめ」と「はは」のどちらを使っていたのか。その後、平安時代になると、平仮名と片仮名が発明され、鎌倉、室町、江戸、明治、昭和、現在にいたるまで、日本語における「娘」の意味と使い方は如何に変遷してきたのか。また一方で、中国語における「娘」の用法はどのように変化したのか。これらの問題に注目し、日本語と中国語における「娘」の意味について、両国の言語と文化の特性を考察してみたい。

二　問題の所在：「娘」から見た日本語と中国語の違い

同じ漢字である「娘」は、日本語と中国語の意味は異なる。例えば、『日本国語大辞典』（小学館）では、「娘」については、次のように解説している。

むす-め【娘】〔名〕（「生（む）す女（め）」の意）

① 親にとって、自分の子である女。めのこ。息女。

② 未婚の女性。若い女。おとめ。

③ 江戸、深川の遊里で、客の応対、遊女のとりもちなどにあたった女。娘分（むすめぶん）。

④ 盗人仲間の隠語。

⑤ （男色の対象として）美貌若年の新入監者をいう、囚人仲間の隠語。

日本語では漢字である「娘」の意味は①のように、主に英語で言うところの「daughter」と同じであるが、英語の「mother」の意味にあたる解説は、前掲した『日本国語大辞典』の①～⑤に見えないということである。

ところが、現代中国語では漢字「娘」の意味は、まったく逆である、つまり「daughter」ではなく、「mother」である。例えば、『現代漢語詞典』（商務印書館）では、「娘」の説明は次のようになる。中国語の意味を簡単に「()」の中に示した。

娘　niáng

（ア）　〈口〉〔名〕母亲：爹～ ―亲～。

（話し言葉、名詞、母親：両親・母親）

（イ）　称长一辈或年长的已婚妇女：大～ ―婶～。

（年上の既婚女性に対する敬称：おばさん・おば）

（ウ）　年轻妇女：渔～ ―新～。

（若い女性：漁業女性・新婦）

中国語である「娘」の主な意味は「母親」であり、つまり「mother」である。また年上の方、あるいは既婚者の女性を指すのである。若い女性を表現する場合もあるが、厳密に言うと、日本語である「娘」、つまり「daughter」の意味はない。

両国の権威的な国語辞書の解釈を比べて見たように、日本語である「娘」と中国語である「娘」の意味はまったく逆になっているのである。「むすめ」と「はは」では正反対の意味である。いったいなぜこのようになったのか。この点については、少し追及してみたい。

まずは、漢字の六書（象形、指事、会意、形声、転注、仮借）の原理から見てみたい。そもそも「娘」の漢字はどのような構造なのか、「娘」の本義は何であろうか。

三　象形文字「娘」と「母」及び「嬢」の関係

なぜ漢字である「娘」の意味には「母」の意味があるのか、またなぜ「娘」は「嬢」と書くのか。つまり「娘」と「嬢」の間に何か関係があるのか。これらの疑問を解くことが本節の目標である。

周知の如く、比較的古い漢字の姿は古代中国の甲骨文である。[1] ここでは白川静の『字通』によって、まず甲骨文字の「娘」の姿を取り上げておきたい。その姿は下記の通りである（図①）。

図①

右図①のように、左側の部分は、漢字の「娘」の「良」の当たる部分である、後に分析してゆく。まずは右側の「女」に当たる部分を見てみよう。この象形文字は古代女性の座り方がよく反映されている。次の図②のように、両手を胸の前に交差して座っている姿である。中国学者の康殷の研究によると、このような姿は、中国河南省の安陽の古墓から発掘された古代中国の貴族婦人の姿と類似している。[2]

図②

またほかの甲骨文字の「女」から見ると、さまざまな女性の頭と髪の毛の様子が見られる。ここでは次の二例を取り上げてみたい。一つは頭を後ろに向けた「女」の姿で、次のようになる。

図③

もう一つは、髪の毛が後ろに向いた年長者である女性の姿である。

図④

頭の上の三本の髪の毛が後ろに向いた「女」（図④）の姿は、甲骨文字の「老」（図⑧）の姿と似ているところが見える。ちなみに「老」の甲骨文字の意象は次の通りである。

図⑤

図⑥

図⑦

図⑧

図⑨

図⑩

康殷の研究に従って、古代から現代までの変遷してきた「女」の象形文字の過程が次のように見られる（図⑪～図⑯）。

図⑪

図⑫

図⑬

図⑭

図⑮

図⑯

ついでに、甲骨文字の「女」の胸の左右に点を入れると、乳房の意味となって、いわゆる甲骨文字の「母」の姿である。詳しい意象は次のようになる[3]（図⑰～図⑳）。

図⑰

図⑱

図⑲

図⑳

以上のように、甲骨文字である「娘」の「女」の姿は、そもそも「母」と同じ姿に見える。そこから「娘」には、「むすめ」と「はは」の意味に繋がっているのではないかと考えられる。

では、なぜ「娘」の漢字は、「嬢」と書くのか。すなわち「娘」と「嬢」の間に何かの関係があるのか。この点については、やはり甲骨文字の文字である「娘」の「良」の側に見てみたい。

前掲した白川静の『字通』によると、甲骨文字の「良」の形は次のようになる。

図㉑

では、この「良」はどういう意味なのかについて確認しておきたい。ちなみに白川静の『字通』の解釈は次の通りである。

長い嚢（ふくろ）の上下に流し口をつけて、穀物などを入れ、それをよりわけ、糧をはかることをいう。

右のように、つまり食品を入れる食器である。まさしく康殷が指摘された通りに、それは昔の食器としての「豆」である。[4] すなわち「中国古代の食器。高杯（たかつき）の一種。木や銅で製し、蓋がある。」（『角川古語大辞典』）。『字通』によると、甲骨文字の「豆」は次のようになる。

図㉒

康殷の研究によると、周代の晩期に蓋がある「銅豆」の意象は次のように見える。

図㉓

食べ物を「豆」の中で熟成をさせると、美味しそうな香りが出てくる。まさに康殷が指摘した次のような意象である。

図㉔

右図のように、四方八方に射した波線の意味は、香りが発散している意象である。そして香の「香」の字は図㉕から図㉘まで、次のように誕生してきたのである。

図㉕

図㉖

図㉗

図㉘

右の図㉘が、「香」の本字である。[5]

今まで見てきたように、甲骨文字の「娘」の「良」は、「香」と繋がることを明らかにした。これは極めて重要なポイントである。すなわち漢字「娘」と「嬢」が繋がるヒントである。

再び白川静『字通』の「嬢」と「娘」の解釈を確認してみよう。

図㉙　娘10画　4343

異体字　［孃］

字音　ジョウ（ヂャウ）

字訓　むすめ・はは

説文解字　

甲骨文　

字形　形声

正字は孃（嬢）に作り、襄（じょう）声。

訓義　［1］　むすめ。

［2］　はは。

白川静が解釈した通り、「娘」の「異体字」の「孃」は、形声の字である。つまり正字の「孃」の読み方は、「襄」の音である。いわゆる「孃」の右側の「襄」の音を借りて使っているのである。「襄」の音は「娘」の「良」と同じ音である。前掲したように、甲骨文字の「良」は「香」と繋がっているから、「香」と同じ音の「襄」を借りて、「良」を表すわけである。

やや複雑な関係であるが、おそらくなぜ「娘」と「孃」に繋がるのか、その原因はむしろ甲骨文字の「良」と「香」の間に微妙な関係があるのであろう。

ここで念のため、「香」と「襄」の同じ音について、確認してみよう。例えば『廣韻』によると、両字の音は次のようである。

香：『廣韻』息良切、平陽、心。

襄：『廣韻』息良切、平陽、心。

右に比較してみると、「香」と「襄」はまったく同じ音である。「襄」の役割は「香」の音を表す効能である。

今まで見てきた通りに、甲骨文字の「娘」は、「女」と「良」を組み合わせた形声文字である。甲骨文字の「良」は、古代の食器の「豆」の中で熟成した食べ物から発散した「香」と類似しているので、「香」と同音の「襄」を借りて、形声された漢字「娘」は「孃」と書くということである。

では、「娘」と「孃」の使い方はいかがであろう。

前掲した『字通』の「字訓」と「訓義」に示したように、「娘」には、二つの意味がある。いわゆる「むすめ」と「はは」である。そもそも古代から、日本語と中国語の「娘」に対する両国の傾向は、如何であろう。この点については、次の節に考察する。

四　「娘娘」と「娘子」

まずは、中国語の「娘娘」を見てみたい。『漢語大詞典』によると、「娘娘」の意味には、七種がある。

①　母親である。

②　主婦と高齢者の女性を称する。

③　宮中の妃。

④　既婚女性の主人の母親。

⑤　祖母。

⑥　女神を称する。

⑦　方言で、父親の姉妹。

①母親と⑤祖母のような意味を含む「娘娘」は、古代中国の典籍の中にはまだ見えない。例えば、『詩経』「小雅」には「誰無父母」のように、母親を表現する場合、「父母」のような語彙が確認できるが、『詩経』にはいずれも「娘」と「孃」は見当たらない。また儒教の著作の中でもいずれも「娘」と「孃」の文字が見えず。例えば、『論語』、『孟子』、『孝経』などの儒教の典籍にも「孃」と「娘」が見えない。古代中国典籍の中では、「む

すめ」と「はは」を表す際に、多くの場面で、「子」と「母」の字を使っている。「子」には、男の子と女の子の両方の意味が含まれている。いわゆる「男子」と「女子」である。例えば、《詩経》「小雅」と「斯干」には、「乃生男子、載寢之床……乃生女子、載寢之地」（もしも男子が生まれれば、寝台に寝せ……もしも女子が生まれれば、大地に寝かせ）[6]がある。

漢代の『説文解字』には「娘」が見えず、「孃」があるが、許慎の解説では「襄」と「良」の同音で、意味が煩わしいことから見ると、少なくとも書物の中で、「はは」と「むすめ」の使い方はそれ以後の時代であろう。

敦煌石窟から発見された唐代の文献には「娘娘」の表現が見える。意味としては、母親や年輩の女性を指す、また女性に対する敬称である。例えば、『敦煌變文集』「目連縁起」には、「娘娘且是親生母、我是娘娘親腹兒」（母親は私の本当の母親であるから、私も母親の本当の腹の子である）。『敦煌變文集』は、唐代や五代に発生していた説唱文学であり、主な内容は神話、仏の経典、歴史の故事、民間の伝説と繋がるものも少なくない。

唐代以後の元代にも「娘娘」が見える。意味は母親より宮廷の「妃」である。例えば、『元曲選』によると、馬致遠の「漢宮秋」第一段には、「兀那彈琵琶的是那位娘娘」（そちらに琵琶を弾いている方はどちらの妃であろうか）。元代以後、特に明代小説の中では、「娘娘」の表現がしばしば登場している。

例えば、有名な『西遊記』第五回には「王母娘娘」という人物が典型的な「娘娘」であろう。ここでは「娘娘」の意味は「母親」である。ある日、「王母娘娘」は天宮にある遥池の中で蟠桃会を開設する予定であった。新鮮な仙桃が必要のため、それぞれの赤い服、青い服、白い服、黒い服、紫の服、黄の服、緑の服を着た七人の仙女が王母娘娘の命令を受けて、桃を採るために蟠桃園に行ったが、なかなか良い仙桃が見当たらない。なぜなら、良い仙桃は当時の蟠桃園の責任者である孫悟空が密かに食べてしまったのである。どうしょう、七仙女が慌てて孫悟空のところに報告した。孫悟空が可愛らしい仙女のお話を聞いてすごく喜んでいたが、後に王母娘娘の招待客リストに自らの「斉天大聖」が入ってなかったことを聞いてから、激怒し天宮を暴れ騒いだのである。

ここで注目したいことは、「王母娘娘」の「王母」という意味である。前述したように、『西遊記』の「王母娘娘」の「娘娘」の意味は「母親」である。同じように、「王母」の意味にも「母親」がある。念のため、『漢語大詞典』の中で、「王母」の意味を確認してみたい。

（A）祖母である。
（B）古代の女性の首領を指す。
（C）神話や伝説の中には極めて気が高い女神である。
（D）一種の鳥の名前であり、形は燕と似ているが、色は紺で、尾が長く特徴がある鳥である。

右の意味を照合してみると、『西遊記』において「王母娘娘」の「王母」は、いずれもA、B、Cの意味と関わる意象であろう。Dは特別な鳥の名前の表現は、主に唐詩の中で登場している。例えば、杜甫「玄都壇歌」の中には、「子規夜啼山竹裂、王母晝下雲旗翻」（夜にホトトギスが啼くと山や竹を炸裂ように響く、昼に王母が飛ぶと戦や旗を雲のように弄す）がある。また同じ母親と祖母の意味を表した「娘娘」と「王母」を、比較してみると「娘娘」より「王母」の方が、古代の中国典籍の中に見える。例えば『礼記』「曲礼下」には「王母曰皇祖妣」（祖母には皇祖妣と呼び）[7]がある。また『周易』「晉」卦には、次のように見える。

六二、晉如愁如、貞吉、受茲介福于其王母。

〔六二は陰柔中正であるが、上の六五は陰柔で中不正であるから相応ずることができない。そこで晉如として進み上らんとするが、愁如として憂えるありさまである。然し貞正な態度を守っておれば、やがては吉である。そして、この大いなる福（さいわい）をその王母（亡き祖母、六五を指す）より受けるであろう。[8]」

以上のように、古代中国では「娘娘」という語彙には、「母親」と「祖母」の意味があることを明らかにした。先秦時代の経典には「娘娘」が見えず、唐代の敦煌石窟の文献による唐代変文、元代雑劇、明代小説の中では「娘娘」がしばしば登場している。『西遊記』以外の小説、例えば『紅楼夢』、『水滸伝』などの小説にも、「娘娘」が多くの場面で登場しているが、紙幅の制限のため、ここでは分析は省略する。

また現代漢語の中では、「娘」を使っている。例えば、母親と似ている女性に対して、名詞や形容詞などの後に「娘」を付けた言い方である。「老板娘」（社長の奥さん）、「大娘」（母親と同じくらい年齢のおばさん）などがある。

一方、日本語では、「娘娘」という表現が古代から見えず、現代語では見えるが、意味としての「母親」と正反対な「むすめ」の意味である。例えば、『日本国語大辞典』では、「娘娘」の解釈は次のようになる。

むすめ - むすめ【娘娘】（日本語）

〔名〕いかにも娘という感じであること。うぶで、あどけない様子の見えること。

＊第三者〔1903〕〈国木田独歩〉七「まことにしほらしい娘々（ムスメムスメ）した、ラブるのには持て来いといふ女」

＊神経病時代〔1917〕〈広津和郎〉二「三年前には自分の妻がまだ娘々してゐて、快活であった事を思ひ出した」

右のように、日本語における「娘娘」の意味には、「母親」と「祖母」の意味は読み取れない。

では、「娘子」はいかがであろう。この点については、続いて考察してみたい。

まず「娘子」の意味を確認しておく。『漢語大詞典』では、四種がある。

（a）少女。また婦人を通称する。

（b）妻。

（c）主婦。

（d）宮廷の妃を称す。

（a）～（d）を合わせてみると、若い女性のイメージが強く見える。例えば、（a）の場合、『北斉書』「祖珽伝」の中では、「老馬十歳、猶號騮駒、一妻耳順、尚稱娘子」（十年を経つの老馬は、また駿馬を言う、年を取った一人の妻は、また少婦を称す）がある。また唐の韓愈『祭周氏侄女文』（周氏の姪に文を祭す）の中に「祭於周氏二十娘子之靈」（周氏の二十歳の少女の霊において祭）があるように、二十歳の女性を指す場面が見える。（b）の場合、例えば、明代の陶宗儀『輟耕錄』の中で「婦女曰娘」（婦人は娘を言う）のように、「都下自庶人妻以及大官之國夫人，皆曰娘子」（都で庶民の妻から及び偉い官人の夫人もみんな娘子と言う）のは当時の事実であろう。（c）の場合、例えば、明代の小説『水滸伝』第七回の中では、「官人休要坐地！娘子在廟中和人合口！」（旦那さん絶対坐ってはいけないよ、奥さんは廟の中で人と口喧嘩しているよ）がある。（d）の場合、有名な楊貴妃の事例と言えるだろう。例えば、『舊唐書』「后妃傳上」の楊貴妃の伝記には、「宮中呼爲「娘子」禮數實同皇后」（楊貴妃は

宮廷の中で「娘子」と呼ばれ、受けた礼儀と礼節は実に皇后と同じである）がある。

基本的に「娘子」は、母親と祖母である「娘娘」と異なって、主な若い女性を指すことが多い。そこで「娘子軍」という特別な表現がある。具体的には『舊唐書』巻五十八「列傳第八」に次のようなエピソードがある。引用文は後晋の劉昫等撰『舊唐書』第七冊「巻五一至巻六六（伝）」（中華書局、一九七五年）による。漢字の表記は旧字体であり、文末に頁数を示した。また文章記号を句読点に直した。現代語訳を「（）」の中に示した。訳文は稿者である。

平陽公主、高祖第三女也、太穆皇后所生。義兵將起、公主與紹並在長安、遣使密召之。紹謂公主曰、「尊公將掃清多難、紹欲迎接義旗、同去則不可、獨行恐罹後患、爲計若何？」公主曰、「君宜速去。我一婦人、臨時易可藏隱、當別自爲計矣。」紹卽間行赴太原。公主乃歸鄠縣莊所、遂散家資、招引山中亡命、得數百人、起兵以應高祖。時有胡賊何潘仁聚衆於司竹園、自稱總管、未有所屬。公主遣家僮馬三寶說以利害、潘仁攻鄠縣、陷之。三寶又說羣盜李仲文、向善志、丘師利等、各率衆數千人來會。時京師留守頻遣軍討公主、三寶、潘仁屢挫其鋒。

公主掠地至盩厔、武功、始平、皆下之。每申明法令、禁兵士無得侵掠、故遠近奔赴者甚衆、得兵七萬人。公主令間使以聞、高祖大悅。及義軍渡河、遣紹將數百騎趨華陰、傍南山以迎公主。時公主引精兵萬餘與太宗軍會於渭北、與紹各置幕府、俱圍京城、營中號曰「**娘子軍**」。京城平、封為平陽公主、以獨有軍功、每賞賜異於他主。

（二三一六頁）

（平陽公主は、唐代の高祖の三番目の娘である。母親は太穆皇后である。当時、義兵の乱が起きそうになり、公主と主人である柴紹はともに長安にいった。遣使が密かに事情を知らせた。柴紹は公主に対して、「これからお父さんは乱を鎮めることで大変だ。私は義軍を迎えにいく予定だが、あなたは一緒に行ってはいけない。しかし、一人で行くと後が心配だ、いったいどうすればよいだろう」と言った。公主は言った。「あなたは早く行ってください。私は一人の婦人で、簡単に身を隠すことができるので、自分で方法は考えられます。」柴紹はすぐ太原へ赴く。一方、公主は鄠縣の莊へ帰り、家の中の財産を配り、山中の亡命者を招待し、数百人を得た。兵士を起こして父の高祖の軍に呼応する。当時の北方の民族の何潘仁が竹園で大衆を集め、自ら総管の官職を称した。公主は馬三宝を使って、潘仁の利害を説得させた。潘仁が鄠縣を侵攻して、勝利。三宝がまたほかの盗賊である李仲文、向善志、丘師利等を説得した。皆それぞれの数千人を率いて会した。京師の留守は頻繁に公主は戦った、三宝、潘仁が幾度に先頭を切った。公主は盩厔、武功、始平の以下までの土地を占領した。各地に行って法令を明確に申し、兵士が無許可で侵略することを禁じた。ゆえに遠いところ、近いところから身を寄せる人は極めて大勢いた。七万人の兵士を得た。公主は密かに使者を命じて高祖に報告した。高祖は大喜していた。義軍が河を渡った後、高祖の命で柴紹は数百の騎兵を率いて急いで華陰に行った、自ら南山の傍らで公主を迎えた。その時、公主は一万余りの精鋭の兵士を率いて、太宗の軍と渭河の北に会った。柴紹とそれぞれの軍営を設置し、一緒に京城を包囲した。軍営の中で「**娘子軍**」と号す。京城を解放した後に、平陽公主を授与した。特に軍功の成績を以て、毎度の下賜品は他の人より異なっていた。）

右のエピソードは、中国では「娘子軍」の由来である。それ以後、平陽公主に関わる事物にも、「娘子軍」と関連する表現が残されている。例えば、現在の山西省の平定県の東北にある「葦沢関」は、当時、唐の平陽公主の軍隊がそこに駐在していた説があり、「娘子関」と言われている。

今まで見てきたように、中国語では「娘子」の意味は、若い女性を表す語彙である。

では、日本語における「娘子」の意味は、どういう状況であろう。

とりあえず古代の中国語における母親と祖母の意味を表す「娘娘」の語彙は、古代の日本語ではないことは確実である。ところが、「娘子」という表現がある。例えば、『古事記』の中では、二箇所ある。それぞれの場面は次のようになる。引用は新編日本古典文学全集による。現代語訳（〔〕）の中に示し、頁数を付けた。「娘子」は太字にした。下同。

（i）下巻　履中天皇

（前略）大阪に遇ふや**娘子**を道問へば直には告らず（後略）

〔大阪に……（大阪で出会った乙女に道を尋ねると、まっすぐ行く道は言わないで、）

（三〇九頁）

（ii）下巻　清寧天皇

（前略）其の**娘子**は、菟田首等が女、名は大魚ぞ（後略）

〔その乙女は、菟田首等の娘で、名は大魚という。〕

（三五八～三五九頁）

右の通り、『古事記』の二箇所の「娘子」は、いずれも「乙女」であることは確認した。すなわち未婚の女性と言える。これは若干の中国語の古語の「娘子」の意味とは異なり、中国語の「娘子」は既婚の女性であっても「娘子」と表す。だが、『古事記』以外の作品ではどうだろう。例えば、『日本書紀』の場合、三箇所の「娘子」はどのように使われているのか。

（Ⅰ）巻第十三　允恭天皇（五年七月―七年十二月）

（前略）当時風俗、於二宴会一儛者儛終則自対二座長一曰、奉二**娘子**一也（後略）

当時の風俗、宴会に儛ふ者は、儛ひ終りて則ち自ら座長に対ひて曰ししく、「娘子奉らむ」とまをししなり。

〔当時の風習では、宴会で舞う者は、舞い終ると自ら座長に向って、「娘子を奉ります」と申しあげることになっていた。〕

（一一四頁）

（Ⅱ）巻第十四　雄略天皇（即位前紀―元年三月）

（前略）大連曰、此**娘子**以二清身意一、奉レ与二一宵一（後略）

大連の曰さく、「此の娘子、清身と意を以ちて、一宵与はしたまふに奉れり。

〔大連は、「この娘は清い身と心で、一夜、天皇のお召しにお仕えしました」

（一五〇～一五一頁）

（Ⅲ）巻第十六　武烈天皇（即位前紀）

（前略）元年春三月丁丑朔戊寅、立二春日**娘子**一為二皇后一（後略）

元年の春三月の丁丑の朔にして戊寅に、春日娘子を立てて皇后としたまふ。

〔元年春三月の丁丑朔の戊寅（二日）に、春日娘子を立てて

皇后とされた」

（二七六～二七七頁）

右の（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）に示してきたように、『日本書紀』では、「娘子」の意味は、「おみな」、「いらつめ」のように、若い女性を指すことが一致している。つまり乙女のような未婚の若い女性を指すことがメインである。このような「乙女」の「娘子」の表現は、江戸時代における作品の中でも見える。例えば、『雨月物語』巻之一「菊花の約」には、次のような描写がある。本文は新編日本古典文学全集による。

其の季女なるものは同じ里の佐用氏に養はる。此の佐用が家は頗富さかえて有りけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、**娘子**を娶りて親族となり、屡事に托て物を餉るといへども、「口腹の為に人を累さんや」敢えて承ることなし。

（二九二頁）

また、『雨月物語』巻之二「浅茅が宿」には、次のような場面にも「娘子」が見える。

寝られぬままに翁かたりていふ。「翁が祖父の其の祖父すらも生れぬはるかの往古の事よ。此の郷に真間の手児女といふいと美しき**娘子**ありけり。

（三二〇頁）

右のように、古代日本語における「娘子」の表現は、古代中国語における「娘子」の「若い女性」の意味と類似している。ただ古代中国語における「娘子」の若い女性は、個人より集めたグループの意象が強い。いわゆる唐代の平陽公主のような若い女性の軍隊のような集団は、日本語ではなかなか見当たらない。

五　日本語「娘」＝中国語「女儿」＋「姑娘」

そもそも「むすめ」と「はは」の両方の意味を持つ漢字である「娘」は、日本語の場合、古代から現代まで、若い女性のイメージに傾き、つまり「むすめ」の意味を採っているようである。例えば、日本語が発明された平安時代では、物語、日記などの作品の中ではしばしば「娘（むすめ）」が登場して以降、歴代の文学作品の中で表している。引用文について、古代作品は新編日本古典文学全集による。文末に頁数を示した。近代作品は『聞蔵』と『ヨミダス歴史館』および「日本近代文学館所蔵太宰治自筆資料集」デジタル版による。作者や作品のタイトル及び新聞日期を示した。

（1）『竹取物語』「かぐや姫の発見と成長」

この人々、在る時は、たけとりを呼びいでて、「**娘**を我に賜べ」と、伏し拝み、手をすりのたまへど、「おのが生さぬ子なれば、心にもしたがはずなむある」といひて、月日すぐす。かかれば、この人々、家に帰りて、物を思ひ、祈りをし、願を立つ。思ひ止むべくもあらず。「さりとも、つひに男あはせざらむやは」と思ひて頼みをかけたり。あらがちに心ざしを見え歩く。

（二一頁）

（2）『平中物語』「三十八　尼になる人」

また、この男、市といふところにいでて、透影によく見えければ、ものなどいひやりけり。受領などの**娘**にぞありける。

（五三〇頁）

（3）『うつほ物語』「俊蔭」

娘、四つになる年の夏より、大きに、心も聡く賢し。父が思ふやう、今はわが娘、もの習ひつべきほどになりにたり。わが身を捨てて習ひし琴、この娘に習はさむと思ひて、かの波斯国より持て渡りし琴どもを取り出でて、二つの琴をば人にも知らせで、いま十を、りうかく風をば**娘**のにす。

（四一頁）

（4）『徒然草』「第四〇段」

因幡国に、何の入道とかやいふ者の**娘**、かたちよしと聞きて、人あまた言ひわたりけれども、この娘、ただ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらず」とて、親許さざりけり。

（一一二～一一三頁）

（5）『近松門左衛門集』「生玉心中」

このおきはにも親がある。おのれと夫婦の約束で、人の**娘**を貰うて。こつちの息子が合点せぬ、そつちの娘を返すと。

（三六五頁）

（6）『人間失格』

桜木町の家の隣りの将軍のはたちくらゐの**娘**が、毎朝、自分の登校の時刻には、用も無ささうなのに、ご自分の家の門を薄化粧して出たりはひつたりしてゐたし、牛肉を食ひに行くと、自分が黙つてゐても、（後略）

（三九頁）

右（1）～（6）までの中古から近代までの代表的な作品の中で表した「娘」は、『倭名類聚抄』の中の「娘（无須女）」と同じように「むすめ」の意味である。日本列島では、最初から「娘」はずっと「むすめ」、つまり「daughter」で定着しているように見える。「はは（mother）」の意味は一度もなかったのである。

一方、古代中国語では、「娘娘（母親と祖母）」と「娘子（若い女性）」という二つの表現があるように、どちらかというと、「はは（mother）」の方面の意味が重く、若い女性の意味もあるが、「むすめ（daughter）」までの意味は、一度も見当たらない。そもそも同じ漢字である「娘」から反映した日本と中国の好みに関わる方向性が違うことを明らかにした。

興味深いことは、現代の日本語における「娘」の表現を、現代の中国語で訳す場合、やや難しくなる時もあるということである。要するに、本節の見出しのように、現代の日本語の「娘」はイコール現代中国語の「女儿（daughter）」と「姑娘（girl）」である。

例えば、前掲した（1）～（6）までの「娘」は、中国語で「女儿（daughter）」と訳すればぴったりと思われる。しかし、次のような日本語に関わる「娘」の表現は「女儿」を対応することができないだろう。

（A）寂聴「森の奥のような静かさ　もて余す、一人きりの夏」

今、私は百歳の夏の終りの一時（いっとき）、京都の市内にある、老人の休養所に入っている。六帖（じょう）二つの室内は、こぢんまりとして、不必要な飾りなど何もない。終日、誰にも会わず、電話も一切かからない。食事だけは黙ってマスクで顔もわからない若い**娘**さんが運んでくれる。

ひとりで食べ、終ったら、食器を洗いもしないで、返しておく。訊（き）いてみないが、私が最年長者だと思っていたら、百以上の人が数人いるということだ。

（『朝日新聞』「文化」2021年8月12日）

（B）井波綾子「話しかけるように、ソフトな印象」

縦書きと横書き、どちらが好きかと問われれば、まずは縦書きと答える。子供の頃から続けてきた習字やペン字が、自然に身についているからだろうか。くずし文字の美しさ、書きやすさなど、何といっても縦書きでしょう。

とはいえ、若い**娘**さんからいただいた1枚のはがきが私を目覚めさせたことがあった。今から30年ほど前のこと。贈った結婚祝いのお礼状だった。はがき一面に横書き文字が1字1字丁寧に、しかもまろやかに簡素にしたためられ、その読みやすさに私は全く心打たれたのだった。

（『朝日新聞』「オピニオン」2020年8月12日）

（C）辻田広幸「ベトナムの若者、交流楽しい」

道路沿いの畑で草抜きをしていると、若い**娘**さん2人が話しかけてきた。なんだか言葉がたどたどしい。出稼ぎで来日したベトナム人で、私が引き抜いている雑草のスベリヒユが欲しいと言う。ベトナムではいつも食べていて懐かしいそうだ。かわいい孫のような助っ人と草抜きを楽しみ、思わぬ国際交流で若返った。

（『朝日新聞』「声」2019年9月27日）

（D）右田和孝「支え合う老人と若い娘」

もはや読むことがかなわないエルネストは、偶然に出くわした素性の知れない若い**娘**ビア（ガブリエラ・ポエステル＝同左）に、手紙の読み書きを依頼する。感情表現が下手なエルネストにビアは訴えるのだった。想（おも）いを秘めたままでいいの？

はた目には、部屋に出入りするようになった若い**娘**との関係は、老いた男がたぶらかされているようにしか映らない。

（『読売新聞』大阪夕刊「娯楽」2020年7月17日）

（E）上辻正七郎「介護で頑張れ　ベトナムの娘さん」

妻と2人で度々、ショートステイのお世話になっています。ある日、若い**娘**さんがやって来て、先輩職員の後について仕事を教えてもらっていました。（中略）ベトナムの**娘**さんで、日本に来てまだ1か月だそうです。日本で一番困っていることを聞いてみると、「漢字が難しい」とたどたどしい日本語で答えてくれました。

（『読売新聞』「気流」2019年5月25日）

（F）浪川知子「「田辺聖子全集」刊行始まる　大阪言葉を次世代に作家生活40年」

六四年に「感傷旅行」で芥川賞を受賞。「小説現代」などのエンターテインメント誌からも原稿の注文が来るようになり、「若い**娘**が恋や仕事をする現代の大阪を書きたい」という念願がかなった。

「耳で聞けばよく分かる大阪弁でも、字で読むと目が疲れてしまう。そこで、ふりがなを使って工夫を凝らしました。

（『読売新聞』大阪夕刊「文化」2004年5月17日）

右の（A）（B）（C）（D）（E）（F）には傍線を付けた太字「娘」は、前掲した（1）（2）（3）（4）（5）（6）の「娘」のニュアンスと異なって、すなわち現代の中国語の「女儿 daughter」として訳はできない。つまり前者の「娘」は、具体的に誰の「娘」の意味ではなく、要するに狭い個別な「むすめ」意味の範囲を超えて、一般的な若い女性を指すという意味である。それを現代の中国語で表す場合、確かに「姑娘（girl）」と言えるだろう。また日本語「若い」形容詞は、中国語で「年轻的」と対応すると、「若い娘」は、「年轻的姑娘（young girl）」と訳すれば、最も相応

しい訳であろう。

この点から見ると、語用論の観点を照合してみれば、まさに次のような視座であろう。引用文の符号を変えたことがある。

言語への特殊な視点と言った方がよいかもしれない。この視点から見ると、語用論は、言語学、社会学、心理学を下位領域にもった、上位に位置する領域である。したがって、論題の領域は潜在的にとても広い。その上、語用論とは、単に言語理論に文脈という次元を加えるだけのものではなく、「広い認知的・社会的・文化的視点から眺め、言語現象をふるまい（behaviour）の形式で用法と関連したもの」と捉えている。[9]

つまり、言語の漢字である「娘」の前に形容詞を付けて修飾すると、家族の内に属する「むすめ」は、広範的な社会における若い女性を表すことができる。日本語と中国語における「娘」を比較して見た結果、言語である「娘」に関わる社会の背後の文化が見える。やはり日本語と中国語における同形語を研究することには意義があるだろう。[10]

六　おわりに

以上、象形文字「娘」が、「はは」に繋がること及び「嬢」との関係を考察し、古代中国語における「娘娘」と「娘子」の意味を考察した。その結果、「娘娘」は母親と祖母の意味があり、「娘子」は若い女性を表していることを明らかにした。特に唐代の平陽公主では「娘子軍」が有名であり、歴代類似された表現が見える。一方、古代日本語では「娘子」の表現が見え、意味は同じく若い女性を指すが、「娘子軍」のような特別な表現は存在せず、古代日本語に「娘娘」の言葉が使われていないことも明白である。古代から現代まで日本語の「娘」に「母親」と「祖母」のような意味は見当たらず現代日本語の「娘」の意味は、「むすめ」と「若い女性」を表すことが明白であり、日本語と中国語における「娘」の背後には広範的な社会性が見える。今後、もっと多くの日本語と中国語における同形語を考察してみたい。

注

（1）沖森卓也「１９８７年には、殷墟遺跡から甲骨文字の出現よりも古い殷墟初期とみられる土器の破片に卜辞が朱書されたものも発掘されており、甲骨文字が漢字の濫觴であるとはまだ断言できない」沖森卓也・笹原宏之『日本語ライブラリー　漢字』（朝倉書店、二〇一七年）六頁。

（2）康殷『文字源流淺説』（栄宝斎出版、一九七九年）四一頁。

（3）同（2）四二頁。

（4）そもそも「豆」の原義は、食器である。後に借りて食べ物を指す意味もある。また容器や容量の単位を表す意味もある。さらに借りて豆のようなものを総称として使われている。一方、初めの「豆」の意味を表示する漢字は「菽」（shū）である。例えば、『詩経』「豳風」には、「六月食鬱及薁、七月亨葵及菽」がある。陶淵明『桃花源記並詩』には、「桑竹垂餘蔭、菽稷隨時藝」がある。

（5）同（2）四七三頁。

（6）石川忠久『詩経』中（明治書院、二〇〇九年）二八八頁。

（7）竹内照夫『礼記』上（明治書院、二〇一〇年）七四頁。

（8）今井宇三郎『周易』中（明治書院、一九九三年）七一九～七二一頁。

（9）ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー著、椎名美智監訳、加藤重広・滝浦真人・東泉裕子訳『新しい語用論の世界　英語からのアプローチ』（研究社、二〇二〇年）八頁。

（10）荒川清秀『日中漢語の生成と交流・受容――漢語語基の意味と造語力』（白帝社、二〇一八年）三〇四頁。